



稲わら焼却防止!!

「土づくり」+「稲わらすき込み」⇒地力増進!

近年は、稲作期間全般が“高温・多照”で推移しており、特に出穂期から登熟期間における高温条件は、後期栄養不足や稲体の活力低下による登熟不良を招き、品質低下の大きな要因となっています。

⇒ 収穫作業終了後は速やかに、「稲わらすき込み」を実施するとともに、「堆肥・有機質肥料」や「土づくり資材」・「もみ殻」等の施用による“地力増進”が重要となります!!

1. 土づくり

《有機質肥料・土づくり肥料》

使用区分	資材名	成分量(%)				10aあたりの施肥量の(目安)	備考
		N	P	K	Si		
有機質肥料	ワールドエース	4.0	5.0	2.0		30 kg	地域の「土づくり計画」に基づいた資材選定をお願いします。
	醗酵ケイフン(ナシヨク)	3.6	4.2	3.3		30 kg	
	鶏ちゃんパワー	4.0	3.0	2.0		30 kg	
	イセグリーン	3.1	4.6	3.1		60 kg	
	ペレ炭	1.3	1.0	1.8	26.0	20kg~40kg	
土づくり肥料	シリカリユウ 17				17.0	60 kg	秋または春施用 保水性・保肥力の改善等

※ N:窒素、P:リン酸、K:カリ、Si:ケイ酸

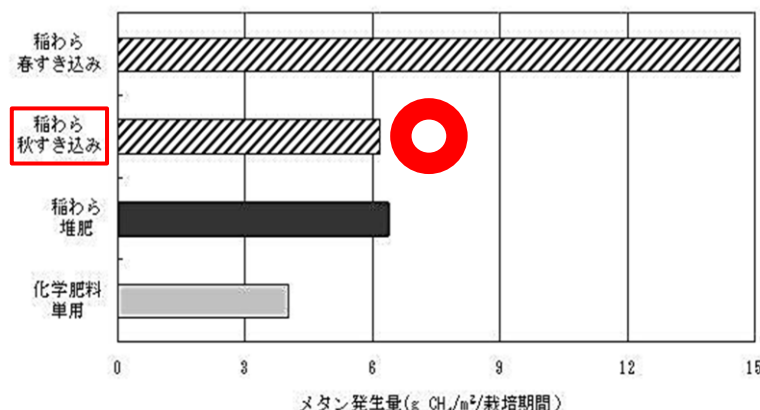
※ 堆肥や有機質肥料、土づくり肥料を散布する場合は、散布後にすき込みを実施して下さい。

◇管内のカントリーエレベーター・ライスセンターにおいても、10月以降、もみ殻がたくさんありますので、有効活用をお願い致します!

(1)すき込み時期

稲わらは、地温の高い時期にすき込むことで分解が促進されます。

すき込み作業は、収穫後できるだけ早く、遅くとも10月中旬までに実施しましょう。



水田からのメタン発生量に対する稲わら処理の影響

稲わらを秋にすき込むことで、分げつ期の土壌の異常還元が抑えられ、メタンの発生や根ぐされの原因となる硫化水素などの発生を大幅に軽減できます。

早めのすき込み作業で、ワキの発生を抑制しよう!



(2)すき込み方法

ほ場の四隅等の稲わらが集まっている部分は、わらを均一にした後、すき込みを実施します。

稲わらの分解に必要な酸素供給や春先の土壌の乾燥促進等を考慮し...

すき込みの耕深は5~10cmの“浅うち”としましょう。

(3)稲わら腐熟促進材の活用

湿田ややむを得ず春すき込みとなったほ場等では、稲わらの分解が進まず、田植え以降の高温により、土壌の異常還元によるワキが発生し、“初期生育不良”や“除草剤成分の拡散阻害による雑草の多発生”を招くことが懸念されます。ワキの発生が懸念されるほ場では、稲わら腐熟促進材を活用し、稲わらの腐熟促進を図ることでワキの発生が軽減されます。

《稲わら腐熟促進材》 ~ JA オススメ資材 ~

大型規格有ります!

資材名	アグリ革命		ワラ分解キング
	細粒	アクア	
使用量	2 kg/10a	100 ml/10a	10 kg/10a
使用時期	・原則、秋施用 ・春施用の場合は基肥とともに、田植え1か月前までに散布		・原則、秋施用 ・春施用の場合は代かき 45日前までに散布後、速やかにすき込む
備考	・すき込みなしでもOK ・すき込みを行うとより効果的		・低温時でも稲わら分解に効果発揮

堆肥や有機質肥料、稲わら腐熟促進剤の施用により、土壌中の微生物の働きを活発にし、稲わらの分解を促進しよう!



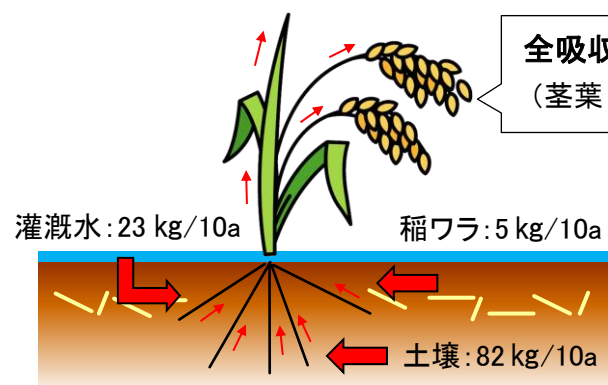
2. 稲わらすき込み

秋すき込みは気温の高いうちに“浅うち”で!【5~10cmを目安に】

ケイ酸の効果

- ・葉いもちや虫害に強くなる
- ・葉の受光態勢、登熟が良くなる
- ・倒伏に強くなる
- ・低温・強風に強くなる 等

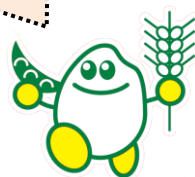
病害虫・異常気象に強い稲づくり!



全吸収量: 110 kg/10a
(茎葉 80 kg、穂 30 kg)

根から吸収されたケイ酸は、“茎葉”と“もみ殻”に吸収されます。稲わらの焼却・持ち出しは、田んぼのケイ酸低下を助長します。

“稲わら・もみ殻”は、良質の「ケイ酸質資材」です!
⇒ 田んぼに還元して地力増進!!



3. 暗渠栓管理

収穫・すき込み作業が終了したら、暗渠栓の閉栓により、“肥料分の流出を防止”しましょう。

